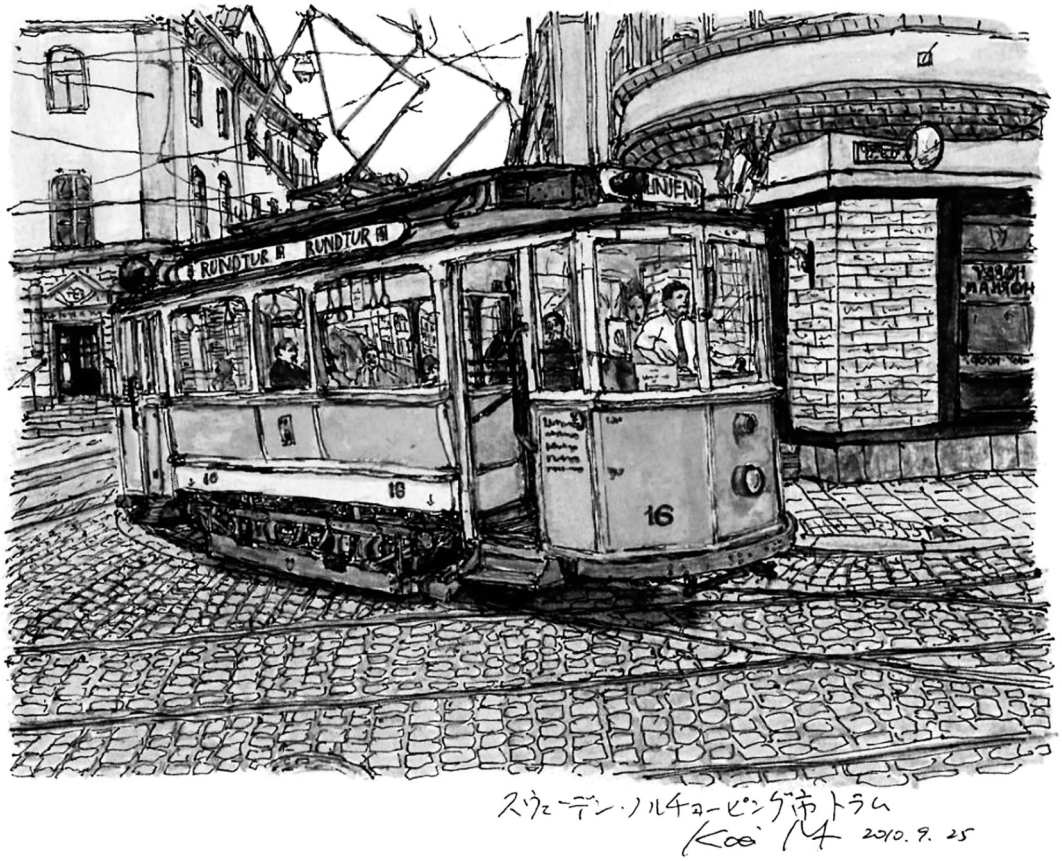
白夜

第 34 号



北海道スウェーデン協会

2013. 4

創立35年を迎える北海道スウェーデン協会

杉本　拓

本年２月、北海道出身の渡邉芳樹駐スウェーデン日本大使を昨年に続いてお招きし、最近のスウェーデン情勢、そして「未来のために今日日本とスウェーデンが出来ること」と題してご講演をいただきました。当初ヴァリエ駐日スウェーデン大使閣下との対談を予定していましたが、大使のマーシャル諸島への公務出張のためやむなく変更になったものです。しかし、ヴァリエ大使は、ほぼ一昼夜航空機を乗り継いで大変厳しい吹雪の札幌においで下さり、短時間でしたが渡邉大使と日本・北海道とスウェーデンの将来について語られたことに出席者一同大変感銘を受けました。その中で、大使は2018年が日瑞外交関係樹立150年、その時に何か両国の関係を深化させる企画をと、希望と夢を私どもに与えてくださいました。あまり時間はありませんが、知恵を出し合いたいと考えます。

そして今年はまた、北海道スウェーデン協会にとって一つの曲がり角を迎えます。それは、これまで中心となってお働き下さった東海大学川崎一彦教授が、定年で札幌を離れてスウェーデンに転出されることです。スウェーデンと北海道とのパイプ役に一段のお働きをいただけるとのことですが、一抹の不安を覚えます。私ごとになりますが、スウェーデンをはじめとする北欧との出会いは、25年前の川崎先生によるものです。ノールウェイ・トロムソ市で行われる北方都市会議の下打ち合わせの途上、ストックホルムで先生がセミナー「サッポロディinストックホルム」を企画してくださいました。著名な方々にお集まりいただいて、川崎先生が「滋賀県出身の私が、何故ストクホルムから札幌に移り住んだか」をお話しになり、そして私が札幌市を紹介させていただいた感激は今でも鮮明な記憶となっています。その後たびたび北欧諸国の地域を訪れ社会福祉、産業振興、自然環境及び芸術文化等多く学ぶことができたことは、私の人生にとって大きな糧となりました。白夜の紙面を借りて感謝申し上げます。

さて、北海道スウェーデン協会は1978年の創立ですから、今年で35年の年月を経過することになります。これまで多くの人々によって有意義な歩みを続けてきたことに敬意を表します。地理的にも、自然・気候も共通することの多い北欧諸国、スウェーデンと姉妹都市提携をしている自治体もあり、また、札幌にはスウェーデン名誉領事館、当別町には財団法人スウェーデン交流センターが存在しています。更に北方圏センターから改称した公益法人北海道国際交流・協力総合センターが開催する北方圏講座など、本年もこれら関係団体と連携を密にしながら北海道民とスウェーデンとの交流を図っていくとともに、５年後の日瑞交流150年に思いを馳せて協議してまいりたいと考えます。

〈本協会会長〉

四半世紀の北海道

川 崎 一 彦

北海道における私の四半世紀（1988-2013）を思い起こしてみますと、以下のような６つのキーワードが浮かび上がってきました。

・北海道
・北欧
・教育（改革）
・幸せ
・利他性（altruism）
・多様性（diversity）

以下それぞれのキーワードについての想いを簡単にご説明させて頂きます。

〈北海道〉

私は北海道とはもともと縁もゆかりもありませんでした。

しかし、ジェトロ（日本貿易振興会）ストックホルム事務所勤務時代には、〈北方圏交流〉に注力していた北海道からの訪問者が多く、たとえば本協会の墨谷和則さんとは、NOREX（北方圏経済交流協会）の北部スウェーデンミッション（1986年）でお手伝いをさせて頂いて以来のおつきあいです。

スウェーデンの生活が長かったので、もう日本の生活には戻れない、と私は思っていました。そして東海大学の札幌キャンパスに日本初の国際文化学部をつくるので来ないか、というお誘いを頂きました。札幌を下見に来た時の私の印象は、「札幌は日本離れしている。日本には住めないが、札幌なら住めそう」というものでした。この印象は今でも変わりません。

そして1988年４月に赴任してから北海道／札幌に25年間、四半世紀お世話になりました。

私は65歳ですが、一カ所に住んでいた場所としては札幌が最長です。期間だけではなく、内容もこれまでの人生で最も充実したものでした。これもお会い出来た皆様のおかげと、心より感謝しております。

〈北欧〉

子ども２人がストックホルムにおり、私は毎年夏休み、冬休みなど年に数回ストックホルムに行き来する生活でした。

公私を兼ねてストックホルムと札幌の２ヶ所で定点観測をしていたことになります。定点観測のメリットは、ストックホルムに居る時は日本に居ては見えない点が、そして札幌に居る時にはスウェーデンにいては見えない点が見えてくることです。

私が札幌に住んでいた四半世紀はいわゆる「失われた日本」の時期でしたが、逆に北欧のさまざまな政策への注目度は世界的に高まって来ています。たとえば、英国エコノミストの２月２日号は「北欧―次のスーパースター」の大きな特集をしました。

世界が北欧に注目する理由を一言で表現するなら、福祉（分配）＋経済（生産）＋持続可能性（総量）を３つすべて手にしている、からでしょうか。

〈教育（改革）〉

私は過去15年ほどは、北欧、とくにフィンランドをヒントとする創造性教育の実践研究にもっとも力を注いできました。

知業の現代は、工業の時代とは違う教育システムが必要である、との確信からです。

知業時代に必要な能力は、何よりも創造性です。そしてクリエイティブなアイデアを実行する能力も大切です。このような考え方から、私はすべての授業における学生の到達目標を創造性と自己効力感（自分でも出来るという確信）の２点に集約してきました。

全国にある東海大学の付属校園では知的財産教育（創造性教育＋起業家精神教育）を展開し

てきました。とくに、付属四高（札幌）での工藤優樹先生とのコラボ、付属本田記念幼稚園（伊勢原）での髙橋功前園長とのさまざまなプロジェクトが強く印象に残っています。本田記念幼稚園の園児がピックカサルミ幼稚園児（フィンランド・バーサ）と共同で制作したアニメはフィンランドの国際映画祭で最優秀作品の一つに選ばれました。

近年は参加型の授業にも力を入れてきました。ファシリテーション、ワークショップなどの参加型授業を取り入れることにより、創発、シナジー、集合知の成果がみられ、学生の授業評価からみると、学びやモチベーションも確実に高まりました。

〈幸せ〉

幸せは人類にとって古くからのテーマです。

しかし20世紀後半から近年とくに幸せへの関心が世界で高騰してきています。

その背景としては、幸せのパラドックス（先進国では所得や経済水準が上がっても生活の満足度が上昇しない現象）、制度疲労の課題先進国NIPPON、2011年の東日本大震災と原発事故（3.11）、などがあげられます。それらに加えて私個人の関心としては、デンマーク人など北欧の幸福度が世界のトップにあること、北海道民の幸福度、などがあります。

具体的には幸せについてOST（オープン・スペース・テクノロジー、北ヨーロッパ学会＝2012年11月、スウェーデン交流センター＝2012年５月など）、ワールド・カフェ、自主映画会（幸福の経済学、happy）などの幸せについて考えるイベントを開催し、参加者からは高い評価を頂くことが出来ました。

〈利他性　altruism〉

『利他性の経済学』（舘岡康雄、2006）はインパクトのある著作でした。

ご一緒に北欧をヒントに北海道において産業クラスターづくりを導入するお手伝いをさせて頂いた戸田一夫さん（元北電社長、会長、道経連会長）や秋山喜代さん（元秋山愛生舘社長）の強い印象が私の眼に焼き付いているのは、自分の会社のことだけではなく、より良い北海道のことを常に考え、行動されていた利他性だからこそでしょう。

2010-11年度に私は内閣府の予算による北海道における社会的企業の起業支援コンペの委員を仰せつかりました。この２年間で123の社会的企業が誕生しました。年齢、性別、地域に関係なく、「社会貢献をするために起業」への関心の高さを実感した事業でした。

学生の間でも社会貢献に対する関心は確実に高まっています。

〈多様性　diversity〉

創造性は多様性から生まれます。日本社会や若者を見ていると、むしろ一様性の方向に逆行している懸念があります。昭和初期の詩人金子みすゞは「みんなちがってみんないい」と表現しましたが、今日の若者は「みんな同じでみんないい」なのかもしれません。

世界最大の家具チェーン・イケアジャパンの社員（コワーカー）の国籍は30近くもあるそうです。多様性の中からクリエイティブな発想と企業の活力が出ています。Martin　Prosperity InstituteのGlobal Creativity Indexによればスウェーデンが世界一クリエイティブ、との結果が出ています。

北海道におけるすばらしい四半世紀を提供して下さった皆様との出会いに私は大切にしている「邂逅（かいこう）」という言葉を使わせて頂きたいと思います。

めぐり会いにありがとう
心からありがとうございました

そしてストックホルムにお越しの時にはぜひ

お会いするのを楽しみにしております。Väl-kommen！

〈参考文献〉

川崎一彦「北海道と北欧との交流および大学生力を活用した教育プロジェクト②」ビョルクvol.117（2013.1）

川崎一彦「幸せについてWhy? What? How?」HOPPOKEN　vol.161（2012秋号）

川崎一彦「北海道における北欧との交流および大学生力を活用した教育プロジェクトの実践研究報告」北ヨーロッパ研究　vol.8（2012）

川崎一彦「コープさっぽろのCSR活動への大きな期待」コープさっぽろCSRレポート2012

〈北海道スウェーデン協会常任理事、東海大学名誉教授〉

川崎教授講演会「北欧の幸せ、日本の幸せ、北海道の幸せ、そして…」

横山　　隆

平成25年１月28日月曜日、ホテルモントレーエーデルホフ札幌にて、本協会新年交礼会と常任理事川崎一彦東海大学教授による講演会とワールドカフェ方式による「しあわせカフェ」が開催された。講演の前半は川崎先生による多角的な視点による「しあわせ」の分析、後半は70名ほどの参加者が３人ずつのグループに分かれたワールドカフェ形式のワークショップ「しあわせカフェ」が川崎先生の司会で行われた。

このようなワークショップは初体験の参加者も多く、参加型の楽しい講演会形式に興奮気味の参加者もいて、あっという間の１時間半を過ごしました。参加者の意見を川崎先生が下記の様に纏めてくださいました。

参加者の気づき、疑問点

〈気づき〉

- 60秒で無駄な言葉を使わないで相手に伝えることの難しさを学んだ。
- ディベートの有用性
- 〈最幸な国〉いい言葉です！　これからどんどん使おうと思います。
- 幸せは自分の考え方一つで感じることが出来る。
- 幸せかどうかは自分の考え方次第。とにかく笑っていれば、幸せはやって来る。幸せは上を見ても下を見てもきりがない。
- やりたいことを見つけた時の自分に戻ってみよう＝幸せ
- 幸福とは多面的な意味を持っている。
- 幸せといっても、過去の幸せと現在の幸せのどちらを考えるのか？　私は今の幸せを書いた。
- 目標を持つこと。何かにワクワク興味を持つ時間を持つ。振り返りをすること。
- 日本は課題先進国

〈疑問点〉

- 今の世の中は人間が幸せを求めて作り上げた便利な世の中だが、環境汚染など代償は多大。もし人類にリセットが出来たとしても、人類はまた同じ道を進み、それを幸せと位置づけるのだろうか？
- 個人的充足感とマクロ、社会的満足度の相克がある（寛容な社会）
- なぜ憲法に〈幸せの追求〉がないのか？
- スウェーデンは日本の参考になるか？
- このままでは、子どもの時代には日本はどうなってしまうのか？　産業全般が沈んでいる。

〈本協会事務局長〉